

# 新発見の白鳳時代の彫刻

## 清岩院の菩薩立像



福生市郷土資料室

## 清岩院の銅造 菩薩立像

像高16.5cm、総高(台座を含む)19.3cm。本体と台座を一鑄した銅像で、後世火中して焼けてはいるが保存は比較的よく、わずかながら鍍金の痕も残っている、いわゆる小金銅仏である。腰をわづかに右に捻り左足を遊足にして蓮華座上に立つ。頭に花文を配した三面宝冠を着けるが正面に化仏は見られない。冠帯は左右とも両手の肘のあたりまで垂れる。右手は屈臂して胸の高さに上げ宝珠を執り、左手は腰下のあたりに下げて第一指と第二指で小さな珠をつまむ。体には耳(耳飾り)、胸飾、腕釧、瓔珞など豊かな装飾品をつけ、それに条帛、天衣を纏う。後頭部に頭光をつけたと思われるホゾ穴のあいた突起がある。ただしこのホゾは一部欠損している。

本像の伝来については、文献、記録も一切伝わらず、現在のところまったく不明である。当寺の創建が室町時代を遡り得ないものであれば、後の時代に古い仏像として納められたものであろう。時の住僧が持来したものか、あるいは檀家の人々が奉納したものか、などが考えられよう。台座は本体と一鑄になる蓮華部だけが残り、現在は蓮華の下部中央にあけられた穴に直径5mmほどの木製棒を嵌入し、江戸時代の後補になる台座に安置されている。本像の当初の造立年代や願意については伝来とともに不明であり、独尊像としてつくられたことも考えられるが、あるいは本体と一鑄になる台座の蓮華部しか残っていないのとその蓮肉下部中央のホゾ穴から

蓮茎をつけて中尊の両脇に立つ脇侍菩薩の一体であった可能性も考えられよう。

さて、本像の童顔であかるい微笑みを湛えた表情ややわらかな身のこなし、身体に飾られたにぎやかな瓔珞など日本の白鳳期(七世紀後半)の仏像に多くが共通し、造立時期もその頃と考えてほぼ間違いないであろう。ただ、背面から見たときの両肩を覆う天衣の開きかたや賑やかに飾られた装飾品、それに腰裳を左脇で結ぶなどいくぶん特異な点も指摘できることから中国初唐期の制作になる可能性もある。

いずれにしても、七、八世紀に遡る古代の多摩地区における仏像は、調布市深大寺の銅造釈迦如来像がはやくから知られ、また近年、国分寺市の国分尼寺の近くで出土した銅造菩薩立像、町田市東雲寺の銅造釈迦誕生像などが知られているが、本像はそれらについて数少ない古代の仏像として大変貴重である。

平成6年7月1日

福生市文化財総合調査・寺社美術品調査班

主任調査員 斎藤経生(女子美術大学教授)

# 清 岩 院 せいがんいん

山号 福生山 臨濟宗 本寺 広徳寺(五日市町)

旧寺号 正連寺

所在地 福生市福生507番地

本 尊 釈迦如来

開 山 心源希徹

開 基 未詳

開創年代 応永年間(1394年～1427年)

清岩院は応永年中(1394～1427)心源希徹によって開かれたと伝える。また、天文年中(1532～54)に北条氏康から永四貫文の寄付を受けたとの伝えがある。本寺広徳寺の所蔵資料に天正16年(1588)3月26日付で北条氏照から出された寺領書き出しの印判状があるが、この書状は福生の正連寺にその本寺広徳寺を通じて寺領として四貫文を宛てがうというものである。清岩院は寺伝によれば、古くは「青蓮寺」と号していたが、中興開基加藤勘助重正(正保2年〈1645〉没、法名、清岩院殿一便宗見大居士)の外護に酬いるため、寺号をその法名をとって清岩院と改めたという。つまり氏照印判状にある「正連寺」は清岩院のことを指していると考えられる。

三代	中西 良介少将	18 12 27	19 10 2	第五航空軍参謀に。
四代	寺本 熊市中将	19 10 2	20 4 30	航空本部長となる。
五代	緒方 辰義中将	20 6 21	——	終戦

### 敗戦

昭和二十年八月十五日、全軍特攻を志し不屈の闘魂に燃えていた陸軍航空の猛者も、ひとたび聖断を仰ぐや「承諾必謹」あくまで聖旨に副うて行動することになった。

日本にとって一番長い日であった。陸海軍の、そして大日本帝国の真の、終焉の日でもあった。

陸軍大臣安南惟幾大將は割腹自刃した。特攻隊生みの親大西滝次郎海軍中将も自刃（十六日午前二時……「吾死をもつて旧部下に謝せんとす」と）。陸軍航空本部長前航空審査部本部長寺本熊市中将も、陸軍航空と運命をとともに自決。審査部総務部長隈部正美少将は、十五日夜、多摩川原において家族もろ共自決された。

技研爆弾関係部長兼審査部員水谷栄三郎大佐は、十六日正午、自決されその死を悼む人達により墓碑が建立された。

### 「碑文」

故陸軍大佐水谷栄三郎 法諡 研光院清烈義榮居士

維時昭和二十年八月十六日正午頃福生町加美ニ在リタル軍仮壕  
舍ニ於テ終戦ヲ一期トシテ壮烈ナル自決ヲ遂ケラル 氏時二行

年四十五歳 遺書ニヨリ遺骸当所ニ葬ル 終戦茲二十周年ヲ迎  
エ氏ノ生前ノ徳ヲ偲ビ追慕ノ情止マズ吾等一同相図テ淨域ヲ莊  
嚴シ靈塔一基ヲ建テ以テ冥福ヲ祈念ス

昭和三十年八月建立 清岩会有志

市内の臨濟宗福生山清岩院墓地に建立されている。

昭和二十年九月三日、占領軍先遣部隊が福生飛行場に進駐する。この日から「横田基地」と変貌するのであった。

九月十三日、大本営はその姿を消し、十月十五日、参謀本部は廃止され、十月三十日、陸軍省は、陸軍航空本部もともに解散された。

そうして陸軍航空は、その思い出だけを関係者の記憶にとどめて、四十年の歴史を閉じたのであった。

### おわりに

以上は、元福生航空審査部員大手吉次氏、浅沼組浜垣寿一郎氏、原田良次氏、わち・さんべい氏からの資料、さらに当時飛行場に、応召・勤務された方々よりの聞き書きを含めて記述したもので、御協力のほどを感謝し、御叱正を乞うものであります。

（たちかわ・あいお 福生市史編さん委員 志茂在住）

要に応じて実験班を編成した。総人員約六〇〇名

昭和十五年四月までが編成期で、立川の陸軍航空技術学校に仮住いをしていた。飛行場の完成と、編成の完結に伴い「福生飛行場」に移駐したのであった。

同時に、福生航空整備学校新築（工費四万五千円）工事が始まり、十六年十二月完成。福生気象部も新設（工費三二万円）同年六月には完成する。（何れも浅沼組施工）

昭和十七年十月十五日、作戦の要求に即応して、航空兵器の審査業務を単化促進するために、航空技術研究所の改編独立と呼応して、従来の飛行実験部を廃止し、飛行実験部の実用審査部門と、航空技術研究所の基礎審査部門を統合して、「陸軍航空審査部」を新設した。

初代本部長は、坂口芳太郎中将である。

陸軍航空整備学校は、拡張増設の工事がつづけられる。

昭和十六年度（工費四万七千円）同十八年度には、第

三・四期（工費一〇二万六千円）と拡張工事が続いた。

当時、福生航空審査部偵察隊に軍属であった、わち・さんべい氏の『空のよもやま物語』光人社刊の一節を借用。

……ぼくがいた陸軍航空審査部（元飛行実験部）は、名称を見たかぎりでは、どこかの建物の中にある一つの部課としかうつらない。が、滑走路千二百メートル、総芝生の、堂々たる飛行場をもつ、新鋭機のテスト機関だった。この飛行場は、武蔵野の松林を南は砂川村（立川市）

の畑をけずりとり、東は箱根ヶ崎（瑞穂町）までに伸ばした広大なもので、その西側に、北から陸軍航空整備学校陸軍気象部、そして航空審査部の各施設があった。

敷地を存分にとったこの航空審査部は、幅のある道路で基盤の目のように区切られ、格納庫などの飛行関係のほか、兵舎が二棟、電機、機械、発動機整備工場、医务、食堂、本部建物など、広く分散されたかたちをとった構えだった。だから、どの部署へ行くにも、百から二百メートル以上の距離があったので、その途中で出会う上官の数は、少なくとも二名はあった。そのたびに、敬礼をしなければならぬ。……新兵さんはつらかった。……航空審査部ときけば、建物のなかの一部署、ひとつの部屋の印象をあたえるが、れっきとした軍用機の検査機関で、各航空会社から出来てきた試作機の適否をきめる航空隊のひとつであり、戦、偵、爆、攻撃と分かれた各隊のパイロットは歴戦のつわものぞろいだった。

……  
昭和十九年三月、福生飛行場に「陸軍航空整備師団」が編成され、それにより立川の陸軍航空技術学校は分遣所となる。

歴代航空審査部本部長（発令及転出）

初代	坂口芳太郎中将	17	10	15	18	5	19	第四飛行団長に。
二代	橋本秀信少将	18	5	19	18	11	1	航空本部兼大本営。

は好適であり、そこで軍部はその主旨を福生村に伝達した。これにより福生村役場は用地の關係地主に、昭和十四年七月四日午後四時印鑑携帯シ必ず出頭スベキ旨を通達した。当日、福生第一小学校には、村内で笹本八十次郎外四名と、村外地主は東京大森区桐ヶ谷町一六〇番地鈴木晋一外四二名の合計八六名が集合した。当時の国情から推察してこの会議において、軍部の要求通り土地売渡しの承諾が行なわれたものと考えられる。

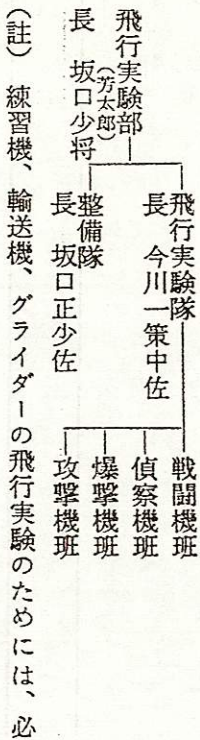
隣村の、箱根ヶ崎村外三カ村（石畑・殿ヶ谷・長岡）組合役場でも、同日關係者が集合したが、反対の一言も発するものもなく先方の希望どうりに買収が進んでしまった。軍部では直ちに土地価格調査の照会状を寄せてきた。これによって、土地の買収がいよいよ具体化するについて、

土地買収に關して委員の選定を行ない、その結果、笹本半左衛門、田村半十郎の二氏を決定、昭和十四年七月六日陸軍航空本部に、次の様に報告している。

土地売買価格評価調査 昭和十四年七月六日				
所在地	地目	反当價格		
		上	中	下
福生村字 武藏野	畑	七〇〇	六五〇	五五〇
日光街道 以東	山林	六五〇	六〇〇	五〇〇
				摘要

土地の買収に併行して、軍部は土地の測量を同年七月七日より向う一カ月間の予定で開始した。測量班員は六名が来村し宿泊して実務に当り、測量人夫は一日およそ三十人。土地の売渡し価格は八月の初旬に至って決定し、同月土地の登記がなされ、ここに最初予定した用地が軍部に売渡されたのである。町の北部一帯で、約二百五十ヘクタールの山林中約二百ヘクタールである（『福生町誌』より。）

昭和十三年四月末、部隊から賜暇帰郷の際『武藏野（福生）の原に飛行場ができるらしい』と聞いた（秋川市村野助治氏）とあり、事前に計画が進んでいたものと思われた。陸軍航空本部は、株式会社浅沼組に対して次の工事を発注するのである。「立川陸軍飛行実験部新築・鉄骨及木造。一六五万八千円。工期は十四年九月—十六年一月迄とす。飛行第五九戦隊長今川一策中佐は、先年報告上申した通りの飛行実験部を設けたからということと呼び戻され、隊長に就任。航空技術研究所（立川）と深いつながりがあるので、福生に設置。全国から優秀なテスト・パイロットを集めることとなり、昭和十四年十二月、次の陣容が整う。



# 福生飛行場ものがたり

立川愛雄

はじめに

福生飛行場を語る前に、まず「立川飛行場」について簡単に記すこととする。

大正十一年十一月十日、首都の防衛強化するために、各務ヶ原（岐阜県）の陸軍飛行第五大隊を移駐して、立川飛行場が発足する。同十四年五月五日、飛行第五連隊と改称されるのであった。

昭和十三年八月三十一日、航空部隊の編成改正により、飛行第五戦隊と改称。翌十四年三月三十一日、千葉県柏市豊四季に移り、帝都防衛任務につくことになる。四月一日には、所沢において編成された「陸軍航空技術学校」が、立川飛行場（飛行第五戦隊跡）に設置されるのであった。

これより先、陸軍航空がいわゆるテスト・パイロットを

養成して軍用機の性能審査に着手したのは昭和五年頃であったが、昭和十年八月には、航空技術研究所の独立となる。同年末、飛行班長今川少佐は欧米の航空事情を視察して列国の趨勢に従い、従来航技研と実施学校（明野等）に分かれていた基本審査と実用審査機能を統合した独立機関の新設を提唱した。その結果、支那事変中の十四年十二月、陸軍飛行実験部（長 阪口芳太郎少将、飛行実験隊・整備隊）が創設され航空技術学校に同居。初代飛行実験隊長には、今川中佐が発令された。そして翌十五年春、専用飛行場の完成により、立川から「福生」へ移転されたのである。

ふっさ飛行場審査部ものがたり

当時、福生村の台地上は地理的に見て一般に利用し難い場所と思われていた。しかし、こうした場所こそ飛行場に



江戸期			明治期		現在(福生市)	
村名	伝承名	新編武蔵 風土記稿	地租改正時		大字	小字
			大字	小字		
武蔵国多摩郡	(石濱)  下	牛浜 (17戸)	福生 1~117	牛浜 117	牛浜 1~163	翻24年 6月11日成立
		萱戸 (8戸) (原ヶ谷戸) 16戸	福生 118~ 520	(萱戸) 志茂 397	志茂 1~244	翻24年 6月11日成立 萱戸 原ヶ谷戸
		中福生 (37戸)		(原ヶ谷戸) (中福生)	福生 中福生 原ヶ谷戸	
小宮領(福生郷) 福生村	中	長沢 (59戸)	福生 521~ 1,178	(長沢) 奈賀 658	福生(長沢)	
		宿 (新屋敷) (50戸)		(永田)	本町 1~142	翻24年 6月11日成立
					東町 1~13	翻59年 3月1日成立
					福生(永田)	

江戸期			明治期		現在(福生市)	
村名	伝承名	新編武蔵 風土記稿	地租改正時		大字	小字
			大字	小字		
武蔵国多摩郡小宮領(福生郷) 福生村	上	上内出 (25戸)	福生 1,179 ~ 1,792番	加美 614	福生	加美
		上屋敷 (23戸) 馬喰ヶ谷戸 (18戸)			加美平 1.2.3田	翻54年 2月1日成立
		ハケ上			武蔵野 791	福生 1,793 ~ 2,937番
		記入なし		二宮武蔵 野富士塚	福生二宮 2,422 ~ 2,488番	翻59年 8月31日成立
	河原	記入なし	福生 2,938 ~ 3,330番	河原 393	北田園 1.2田	翻50年 7月28日成立

江戸期			明治期		現在(福生市)	
村名	伝承名	新編武蔵 風土記稿	地租改正時		大字	小字
			大字	小字		
武蔵 国 多摩 郡 拜島 領(福生郷) 貞長 川 本村	南	(南) (31戸)	熊川 1~ 196	南 196	熊川	南
	内出	内出 (41戸)	熊川 197~ 517	東 320	熊川	内出
	鍋ヶ谷戸	鍋ヶ谷戸 (55戸)	熊川 518~ 922	北 402	熊川	鍋ヶ谷戸
	牛浜 (石浜) (横新田)	牛浜 (31戸)	熊川 923~ 1,058	牛浜 135	熊川	牛浜 横新田
	ハケ上	記入なし	熊川 1,059 ~ 1,712	武蔵野 659 熊川二宮	熊川 熊川二宮 (2547)	武蔵野 1859年 8月31日成立

江戸期			明治期		現在(福生市)	
村名	伝承名	新編武蔵 風土記稿	地租改正時		大字	小字
			大字	小字		
右 同	河原	記入なし	熊川 1,713 ~ 2,786	下河原 (?)	南田園 1.2.3丁目	1850年 7月28日成立
<p>注</p> <p>『新編武蔵風土記稿』は、文政5年頃(1,822)多摩郡の部成る。「地租改正」は、明治6年(1,873)に開始し、同14年頃完了(廃止?)した。</p> <p>石浜、横新田は、何れも、牛浜地区の異称である。</p> <p>江戸期の地名下の数字は、幕末期の人別帳による戸数。</p>						
MEMO						

福生市の地名変遷表

福生市文化財調査会編

